

韓国語と日本語の動詞結合の体系

—和田(2011)の批判的な検討を通して—

李 忠 奎*

(e-mail : ch4229@hanmail.net)

目 次

1. はじめに
 2. 和田(2011)の概観と問題の箇所
 3. 和田(2011)の批判的な検討
 - 3.1. 韓国語の複合動詞の諸形式
 - 3.2. 複合動詞の認定の問題
 - 3.3. 過剰な一般化の問題
 4. 本稿における韓日両言語の動詞結合の体系
 5. まとめ
-

1. はじめに

本稿は、韓国語と日本語の複合動詞の体系について分析した和田(2011)を批判的な観点から検討し、韓日両言語の動詞結合を体系的に整理しようとするものである。具体的には、語彙の緊密性という観点から両言語の複合動詞を分析した和田(2011)について同意すべきところは同意し、首肯しかねるところは批判的な分析を加えることによって、最終的には両言語の動詞結合の体系を新たに提示する。なお、和田(2011)は考察範囲を「複合動詞」に限定して分析したが、後述するように、その限定には幾つかの問題があると思われるので、本稿では複合動詞と分類しにくいものまで広く含めて「動詞結合¹⁾」という名

* 西原大学校、助教授、対照言語学

1) 本稿における動詞結合とは文字通りに動詞と動詞が結合したものであり、具体的な例としては「쉬고 가다, 休んで行く」のような句、「먹어 보다, 食べてみる」のような補助動詞結合、「뛰놀다, 飛び回る」のような複合

で分析を行うことにする。考察範囲をこのように拡大することによって、和田(2011)の不十分なところを補うことができ、また、韓日両言語の動詞結合の全体像が体系的に把握できるようにもなると期待される。

2. 和田(2011)の概観と問題の箇所

和田(2011: 96)は、語彙的緊密性という観点から韓日両言語の複合動詞を分析し、そこに見られる特徴を以下のように整理した。なお、紙面の都合上、以下の議論において複合動詞を「CV」(Compound Verb)という略語で示す場合がある。

【表1】 和田(2011: 96)の韓日両言語の複合動詞に関する整理

部門	韓国語			日本語			
	語彙部門		統語部門	語彙部門		統語部門	
	A	B	C	D	E	F	G
タイプ	語幹CV	V-eCV	AVC	語彙的CV	テ形CV	統語的CV	AVC
生産性	低	高/低	高	低	低	高	高
透明性	低	高/低	高	低	低	高	高
隣接性	義務的	義務的	義務的	義務的	義務的	義務的	義務的
代用表現	不可	不可	可	不可	不可	可	可
とりたて詞の挿入	不可	可	可	不可	可	不可	可
V2の反復	不可	可	可	不可	可	不可	可
活用形	語幹	V-e形	V-e形	連用形	テ形	連用形	テ形

※原文では下線によって、BとE・CとGがそれぞれ対応するものと記されている。

そして、同氏はその考察結果を以下のようにまとめている。

- (1) もはや生産的な過程とは言えない韓国語の語幹複合動詞 (A) を除くと、韓国語には二つの複合動詞形式、日本語には4つの複合動詞の形式があることになる。更に、詳細に見るならば、韓国語のV-e複合動詞 (B) と日本語のテ形複合動詞 (E)、韓国語のAVC (C) と日本語のAVC (G) が対応する。これに対し日本語の語彙的複合動詞 (D) と統語的複合動詞 (F) は対応する形式が韓国語にないことが判明する。(和田2011: 95、引用者による例文の番号は省略)

以上の和田(2011)の分析は、塚本(2003、2004、2009)などの先行研究と比べて、①「뛰놀다、오르내리다」のような例 (表1のA類) も考察範囲に入れ、それらの形態・

動詞を挙げることができる。動詞結合という用語は複合動詞などを含むより大きなカテゴリーとして用いられることになる。なお、当該の3分はあくまでも大まかな分類に過ぎず、例によっては句と複合動詞、または、補助動詞結合と複合動詞の間にまたがるものもあり、その区分がいつも明確であるとは限らない。

統語上の特徴を具体的に明示したこと、②「읽어 주다, 읽어 버리다」のような例(表1のC類)と「読んであげる, 読んでしまう」のような例(表1のG類)を対応するものとして分析したこと、③「買って出る, 食って掛かる」のような例(表1のE)を「複合動詞」というカテゴリーで分析したことに意義があり、この3点は韓日両言語の動詞結合を体系的に整理する上で大いに参考になる。しかし、和田(2011)の分析は、少なくとも以下のような3点で再検討を行う必要があると思われる。

- (2)a. 韓国語の複合動詞が網羅されていない。
- b. 複合動詞と認定しにくいものが含まれている。
- c. 分析の過程において過剰な一般化が見られる。

(2)の問題は、両言語の複合動詞を網羅的に扱いつつ、より精密に分析するためには検討を要するものであり、議論するに十分値すると思われる。当該の問題が適切に解決され、和田(2011)の不十分なところが補えれば、それは両言語の動詞結合の体系を整理する上でも重要な成果になるだろう。以下、次節で(2)の問題について詳細に検討する。

3. 和田(2011)の批判的な検討

3.1. 韓国語の複合動詞の諸形式

まず、最初に検討したいことは、韓国語の複合動詞が網羅されていないという点である。和田(2011)が韓国語の複合動詞として扱っているものは二つの形式であり、一つは(3a)のように前項動詞(V1)に語幹の形式が立つもので、もう一つは(3b~d)のようにV1にV-어(V-e)という形式が立つものである。同氏は、(3a)は「語幹複合動詞」という名で、(3b)は「AVC」(Auxiliary Verb Constructionの略語)という名で分析しており、また、(3c~d)は「V-e複合動詞」と名付けたが、この用語は、(3c)の「不透明なV-e複合動詞」(V1とV2の意味から複合動詞全体の意味が構成的に導けないもの)と(3d)の「透明なV-e複合動詞」(V1とV2の意味から複合動詞全体の意味が構成的に導けるもの)を一括するものとして用いられている。

- (3)a. 지르디디다²⁾, 오르내리다, 뛰놀다 (表1のA類)
- b. 읽어 주다, 읽어 버리다, 만나 보다 (表1のC類)

2) 『표준국어대사전』(以下、『표준』)に見出し語として収録されているが、日常的には殆ど用いない例であり、より一般的な例を提示した方が良いという観点からでは問題点として指摘することができる。

- c. 내려앉다, 태어나다, 드나들다, 접어들다 (表1のB類)
- d. 걸어 다니다, 구워 먹다, 뛰어 가다 (表1のB類)

この内、(3d)のようなものを「複合動詞」として認めて良いのか、という点については後で詳細に論じることとし、韓国語の複合動詞を上記のようなものしか扱っていないことは、韓国語の複合動詞、ひいては、韓国語の動詞結合の全体像を把握しにくいという点で不十分であると言わざるを得ない。韓国語の複合動詞には以下のような形式もある。

- (4)a. 파고들다, 타고나다, 싸고돌다, 주고받다, …
- b. 떠다밀다, 쳐다보다, 바라다보다, 넘어다보다, …

(4a)は {－고} という要素が介在するものであり、(4b)は {－아다/－어다} という要素が介在するものであるが、これらも(3c)の {－아/－어/－여} という要素が介在するものと共に、韓国語の複合動詞としての資格を十分有する。以下、和田(2011)の語彙的緊密性のテストも参考にしつつ、幾つかの操作を通してその証拠を提示する。なお、以下の議論においては、必要に応じて、(4a)を {－고} 有りタイプの複合動詞、(4b)を {－어다} 有りタイプの複合動詞と呼ぶことがある。

第1に、(4)の両タイプの複合動詞は、{－서} か {－가} による境界部の分離³⁾と、副詞類による境界部の分離を許容しない。

- (5)a. 담당 형사가 사건의 내막을 파고들었다. (『표준』、修4)
- b. *담당 형사가 사건의 내막을 파고{서 / 깊숙이} 들었다.
- (6)a. 버스 차장이 성수를 떠다밀었다. (『연세한국어사전』 : 589、修)
- b. *버스 차장이 성수를 떠다{가 / 힘껏} 밀었다.

第2に、(4)の両タイプの複合動詞はその一部を移動などの統語規則の適用対象とすることを許さない。

- (7)a. 그는 천부적인 재능을 타고났다.
- b. *천부적인 재능을 타고 그는 났다.
- (8)a. 버스 안의 손님들이 그를 힐끔힐끔 쳐다보았다. (『표준』)
- b. *그를 힐끔힐끔 쳐다 버스 안의 손님들이 보았다.

3) このことに関しては、김일병(2000 : 100~102)を参照されたい。

4) 引用者による若干の修正が加わる場合の略語である。なお、出典が明示されていない例文は作例である。

第3に、(4)の両タイプの複合動詞はその一部を代用表現に置き換えることも許さない。

- (9)a. 어머니는 형만 싸고돈다. (『표준』)
- b. *아버지도 형만 그래 돈다.
- (10)a. 그는 창밖을 물끄러미 바라다보았다. (『표준』)
- b. *그녀도 창밖을 물끄러미 그래 보았다.

第4に、(4)の両タイプの複合動詞は、述語分裂構文にした場合、V2のみを反復することは難しい。ちなみに、この場合、適格な文にするためには、(11c)と(12c)のように、その全体を反復する必要がある。

- (11)a. 매년 1월에 영수는 친구와 선물을 주고받는다.
- b. *매년 1월에 영수는 친구와 선물을 주고받기는 받았는데, …
- c. 매년 1월에 영수는 친구와 선물을 주고받기는 주고받았는데, …
- (12)a. 그는 승진의 기회를 호시탐탐 넘어다보았다. (『표준』)
- b. *그는 승진의 기회를 호시탐탐 넘어다보기는 보았지만, …
- c. 그는 승진의 기회를 호시탐탐 넘어다보기는 넘어다보았지만, …

上記の全ての事実は、V1とV2が緊密に結ばれていることから生じる現象であり、当該の例を1語として認定する際の形態・統語レベルにおける重要な根拠になる。さらに、意味レベルにおいても、(4)の両タイプの例には何らかの意味の特殊化が観察され、例えば、(5a)の「파고들다」と(6a)の「떠다밀다」は、それぞれ〈掘り下げる〉〈強く押す〉という意味であり、(9a)の「싸고들다」は〈かばう、庇護する、えこひいきする〉という意味であるが、これらはV1の意味とV2の意味の単純な組み合わせではなく、特殊化した意味と見るべきものである。このような意味の特殊化も当該の例を1語として認定する際の重要な根拠になる。

以上の事実に基づくと、(4)のような例を韓国語の複合動詞として認定することは十分可能であり、実際に、韓国語の文法において(4)のような例が韓国語の複合動詞の一種であることは広く受け入れられている(정원수1992: 54, 남기심・고영근1993: 214~215, 김일병2000: 100~102, 김정은2000: 163~166, 한길2006: 197~198, 고영근・구본관2008: 239~240等)。韓日両言語の複合動詞を網羅的に扱うためには {－고} 有りタイプの複合動詞と {－어다} 有りタイプの複合動詞の存在を見逃すべきではない。

3.2. 複合動詞の認定の問題

次に検討したいことは、複合動詞の認定に関する問題である。具体的には、和田(201

1:91~92)が(3d)の「걸어 다니다, 구워 먹다, 뛰어 가다」のようなものを「透明なV-e複合動詞」という名で韓国語の「複合動詞」として扱っているという点である。同氏は当該の例が複合動詞としての資格を有するかどうかの分析は行わず、これらが複合動詞であるという前提の基で、どの部門で形成されるのか、つまり、統語部門で形成されるのか、それとも、語彙部門で形成されるのかを、1)限定詞(とりたて詞とも言う)の挿入可否、2)述語分裂におけるV2の反復可否、3)V1の代用表現化の可否という操作を通して分析している。しかし、同氏が挙げている「걸어 다니다, 구워 먹다, 뛰어 가다」のようなものを複合動詞として認定したことには指摘せざるを得ない問題がある。それは当該の例が境界部の分離を許すという点である。

- (13)a. 그 당시 모든 아이들은 학교를 걸어서 다녔다.
 b. 영수는 두부를 노릇노릇하게 구워서 먹었다.
 c. 학생들이 학교까지 뛰어서 갔다.
- (14)a. 그 당시 모든 아이들은 학교를 걸어서 힘겹게 다녔다.
 b. 영수는 두부를 노릇노릇하게 구워서 맛있게 먹었다.
 c. 학생들이 학교까지 뛰어서 서둘러 갔다.

(13)は {－서} によって、(14)は更に副詞や副詞形などの副詞類によって境界部が分離できることを示したものであるが、両方とも適格な文として成立すると判断される。大体の場合、{－서} による境界部の分離が可能であれば、副詞類によるそれも可能であるが、他の要素によって境界部の分離が可能であるということは、その分、V1とV2が緊密には結ばれていないことを意味する。結果的に当該の例は、和田(2011)自身が分析の基準として取り入れた語彙的緊密性に違反するものになる。周知のように、複合動詞は複合語の下位分類であり、複合語は、派生語・豊語と共に「語」の一種なので、複合動詞は「語」である。そして「語」である以上、語彙的緊密性の確保が重要な前提になる。もし、境界部の分離を許容する例までを「複合動詞」として認定するのであれば、結果的に「語」における語彙的緊密性という概念は無意味なものになってしまうだろう。

勿論、当該の例を形態・統語レベルからではなく、意味レベルに限定して分析すれば、例によっては「語」として認定可能なものもある。例えば「걸어 다니다, 뛰어 가다」はV1とV2が各々独立的に存在する別々の動作ではなく、V1がV2の「手段」を表すと解釈できることから、その全体を一つの動作と見るべきものである。つまり、意味的には1動作で、「먹고 오다, 쉬고 가다」のような2動作とはっきり区別することができ、意味レベルでは「語」の認定が可能なのである⁵⁾。しかし、これはあくまでも意味レベルに限定し

5) この指摘は「구워 먹다」には当てはまらない。「구워 먹다」は、意味構造上「굽고 나서 먹다」という解釈になるので、2動作と分析され、これを複合動詞として認定できる強力な根拠はないだろう。

ての分析であり、複合動詞かどうかの認定においては、(13)と(14)のような境界部の分離可能性を見逃すべきではない⁶⁾。

- (15)a. 当時、全ての子どもたちは学校を歩いて通った。
- b. ヨンスは豆腐をこんがりと焼いて食べた。
- c. 学生たちが学校まで走って行った。

(15)は(13)を日本語に逐語訳したものであるが、もし、当該の3例のようなものを韓国語の複合動詞として認めるのであれば、これらと形態・統語的にも意味的にも1:1の対応関係を示す「歩いて通う、焼いて食べる、走って行く」のような例も日本語の複合動詞として認めるべきであり、それが妥当な処置であろう。しかし、和田(2011)は「걸어 다니다, 구워 먹다, 뛰어 가다」は複合動詞と認定しているのに対して、それぞれに対応する「歩いて通う、焼いて食べる、走って行く」についてはただ韓国語の訳として挙げているだけで、それ以上何の言及もしていない。

以上、当該の「걸어 다니다, 구워 먹다, 뛰어 가다」のような例を韓国語の複合動詞と分析していることは、複合動詞を厳格に規定しようとする立場からすると、副詞類によって境界部が分離可能であるという点が問題になり、また、和田(2011)が複合動詞を厳格に規定せず、広く認める立場であることを十分考慮しても、当該の例と1:1の対応関係を示す「歩いて通う、焼いて食べる、走って行く」を日本語の複合動詞として扱っていないことは一貫性という点で問題を指摘することができる。いずれも問題があることになり、このような問題の適切な整理が本稿で韓日両言語の動詞結合の体系を新たに提示する際の一つの重要な課題になる。ちなみに、(13)と(14)のように、V1とV2の本来の意味を有しながら、境界部の分離が比較的自由に可能なものは本稿では2語扱いする「句」として分類されることになる。

3.3. 過剰な一般化の問題

最後に検討したいことは、分析の過程において過剰な一般化が見られるという点である。具体的には、1)「AVC」におけるV1の代用表現への置き換え可能性、2)「AVC」におけるV2のみの反復可能性、3)「不透明なV-e複合動詞」におけるV2のみの反復可能性、4)V-어(V-e)形が1音節の場合のとりたて詞挿入に関する制約、の4点に関わる問題である。

まず、第1点目と関連して問題となるのは、和田(2011: 86, 96)が「AVCのV1は代用表現に置き換えることが可能である」と分析したことである。前述した通り、ここで言う

6) ちなみに、影山(1993: 13)は「語の認定において真に重要なのは形態的な特質のほうである」と指摘している。

「AVC」とは具体的には、(3b)の「읽어 주다, 읽어 버리다, 만나 보다」のようなもの、即ち「補助動詞結合」と呼ばれるものであるが、この類の例におけるV1は代用表現への置き換えが可能であると断言しているのである。しかし、これは過剰な一般化である。例によってはそれが難しいものもある。

- (16) ~어 버리다, ~어 가다, ~어 오다, ~어 놓다, ~어 두다, ~어 보다, ~어 주다, ~어 대다, ~고 있다

当該の問題について議論するためには、まず、補助動詞結合のリストを明確に提示する必要があるが、和田(2011)ではそのリストに関しては全く触れていないので、本稿では(16)の例を用いて検討することにする。ちなみに(16)の例は、최현배(1961)・김기혁(1987)・김석득(1992)・남기심·고영근(1993)・서정수(1996)・손세모들(1996)・김영태(1998)・박선옥(2005)・황화상(2013)の先行研究が「補助動詞結合」として共通に認めているものである⁷⁾。このうち、「~고 있다」は和田(2011)では取り上げられていないので、その他の例に限定してみると、V1の代用表現化が可能なものばかりではないことが確認できる。

- (17)a. 철수가 가방을 던져 버리자 영희도 그래 버렸다.
 b. 만약 네가 죽어 버린다면 나도 그래 버릴 거야. (강현화1998 : 82)
 (18)a. *영수가 산을 향해 외쳐 대자, 철수도 그래 댔다.
 b. *네가 자꾸 울어대니, 나도 그래 대고 싶어진다. (강현화1998 : 103)

강현화(1998 : 81, 103, 143)によると、「~어 버리다」は他の例と比べて、V1の代用表現化が相対的に最も自然であり、「~어 대다」はそれが不可能であるが⁸⁾、後者の場合は(19)の例文からも確認できるように、同操作が難しいと思われる。

- (19)a. *잘못이 없다고 먼저 형이 우겨 대니 동생도 그래 댔다.
 b. *아이들이 깔깔 웃어 대니 어른들도 깔깔 그래 댔다.
 c. *철수는 양 떼를 몰아 대고 영수는 소 떼를 그래 댔다.
 d. *둘째가 모자 사 달라고 졸라 대자 셋째는 신발 사 달라고 그래 댔다.

7) 参考にした各々の先行研究には、(16)の九つの例以外にも4~13個の他の「補助動詞」も含まれている。このことは「補助動詞」をどこまで認定するかに関しては研究者の間にかんがりのばらつきがあることを意味する。

8) 강현화(1998)の代用表現の対象になるのは、正確にはV1のみではなく、「가방을 던져, 죽어, 산을 향해 외쳐, 자꾸 울어」のようなV1を含む先行節である。しかし、(17)と(18)の文において、V1のみを代用表現化しても、即ち「철수가 가방을 던져 버리자 영희도 가방을 그래 버렸다」「*영수가 산을 향해 외쳐 대자, 철수도 산을 향해 그래 댔다」のように操作してもその成立可否には変わりがないだろう。

また、(20)は강현화(1998 : 96, 100)の例文をV1のみの代用表現化の形に修正して引用したものであるが、このような例文を通して、「~어 놓다」と「~어 두다」においてもV1の代用表現化が難しい場合があり、常に可能であるとは言えないことが確認できる。

- (20)a. *그는 여행을 하기 전에 멀미약을 먹어 놓았다. 그녀도 멀미약을 그래 놓았다.
 b. *그가 멀미약을 먹어 두자 나도 멀미약을 그래 두었다.

結論的に、和田(2011)の「AVC」、即ち「補助動詞結合」と分類される例の中には、V1の代用表現への置き換えが可能なものもあり、その操作が難しいものもあって、同氏の「AVCのV1は代用表現に置き換えることが可能である」と断言したことについては再考の余地があると思われる⁹⁾。

次に、第2点目と関連して問題となるのは、和田(2011 : 87)が「AVCに述語分裂を適用した場合にも、AVC全体だけでなく、V2のみの反復が可能である」と記述したことである。結論的に言うと、この記述も過剰な一般化であり、例によっては当該の操作が難しいものも存在することが以下の例文を通して確認できる。なお、(21)と(22)は、강현화(1998 : 82, 86, 91, 93, 97, 100, 103)の例文をそのまま引用したものであり、下線は引用者によって施されている。また、各例は(16)に含まれるものであることも確認されたい。

- (21)a. 할아버지가 어제 갑자기 돌아가서 버려 버렸다.
 b. 이 빵 좀 먹어 봐 봐. 얼마나 맛이 있는데.
 c. 이번만 믿어 줘 주지.
 d. 할 말을 머릿속에 미리 외워 뒤 두면 실수가 적다.
 (22)a. *과일이 빨강게 익어 와 온다.
 b. *과일이 빨강게 익어 가 간다.
 c. *밀린 빨래를 해 놔 노니 마음이 가볍다.
 d. *그녀는 큰 소리로 웃어 대 댄다.

このように、「補助動詞結合」と分類される例の中にはV2のみの反復が可能なもの、それが難しいものがあり、和田(2011 : 87, 96)の「AVCはV2のみの反復を許す」という指摘は過剰な一般化になる¹⁰⁾。

9) 和田(2011)が、V1の代用表現化に限ってはそれが可能なものだけを「AVC」と見る立場であるならば、上記の同氏の指摘は正しいと言える。しかし、もし、そのような立場なら、結果的に韓国語の「AVC」に含まれる例が先行研究と比べてかなり少なくなるだろうから、それもまた問題点として指摘することができる。

10) 강현화(1998 : 82, 91, 93, 100)が成立すると判断した(21)の例文の中にも適格な例文として認めることが難しいものがあるのではないだろうか。

次に、第3点目と関連して問題となるのは、和田(2011: 90~91)が「不透明なV-e複合動詞はV2のみの反復が可能である」と分析したことである。前述したように「不透明なV-e複合動詞」とは具体的には、(3c)の「내려앉다, 태어나다, 드나들다, 접어들다」のようなものを指すが、この類の例におけるV2のみの反復が可能であると指摘しているのである。そして、同氏はその例として以下のようなものを挙げている。ちなみに、(23a)は浅尾(2009: 8)の例文の一部を引用したもので、全文は「태어나기는 낫지만 아무에게도 축복을 받지 못했다」という文であり、浅尾(2009: 8)もこの文におけるV2の反復を適格なものとして認めている。

- (23)a. 태어나기는 낫지만
b. 교수님은 돌아 가시기는 가시었는데

しかし、どうであろうか。果たして、この二つの文を認定可能なものとして認めることができるのだろうか。そして、この結果に基づいて、「不透明なV-e複合動詞におけるV2のみの反復は可能である」と一般化したのは適切な分析であろうか。韓国語母語話者の感覚としては、(23)の二つの文を容認可能なものとして認めることは難しく、たとえ、認める母語話者がいるとしても不自然さの問題は依然として残るため、これを根拠に上記のように一般化するのはどうしても同意することができない。今まで観察した範囲では韓国語の複合動詞と分析できるものの中に、V2のみの反復が可能なのはあまり見当たらず、その操作が難しい例の方が遥かに多い。断言することはできないが、「不透明なV-e複合動詞におけるV2のみの反復は難しい」と一般化するのがより現実的な分析であると言えるのではないだろうか。

最後に、第4点目と関連して問題となるのは、和田(2011: 99~100)が「V-e形が1音節になる動詞が「AVC」「V-e複合動詞」のV1として現れる場合、限定詞の挿入ができず、この1音節制約は「AVC」や「V-e複合動詞」固有の制約である」と分析したことである。同氏はその具体例として、김창섭(1981: 54)などの先行研究から引用したものを含めて、以下のような例文を挙げている。(24)が「AVC」の例であり、(25)が「V-e複合動詞」の例である。

- (24)a. *자도 주세요.
b. *해는 보세요.
(25)a. *겨는/만/도 안왔다.
b. *약속을 까도 먹었다.

確かに、V-어(V-e)形が1音節である場合、その境界部にとりたて詞を挿入し、適格な文を作り出すのは簡単にできることではない。しかし、それが全くできないわけではなく、可

能な場合もあることが以下の例を通して確認できる。

- (26)a. 혼자 백화점에 가만 봐라. 가만 안 있을 거야.
 b. 직접 가도 봤지만, 잘 모르겠다.
 c. 일단 와만 봐. 틀림없이 마음에 들거야.
- (27)a. B스님이 며칠 전 나를 찾아와 자서전을 대필해 달라며 자료를 내놓았다. 그러면서 하는 소리가 자서전만 잘 써주면 처사님 승용차 한 대 값 드리겠소였다. 그는 또 말하기를 이 자료집에 다 있긴 하지만 보시행(布施行)으로 자비 베풀고 중생 제도한 것을 근사하게 써만 준다면 승용차 한 대 값 말고도 달리 후사하겠노라며 ~ (강준희1996 : 197)
 b. 세스트라양도 (중략) 그가 마음에 든 듯한 우리 청년에게 「조선에 같이 가만 준다면 사랑하겠다」 하였고~ (이태준2001 : 23)
 c. 다행히 밤나무 임자는 더 이상 쫓아오지 않고 저만치서 소리를 쳤다. “다시 와만 봐라, 혼내 줄 테니.” (김후란2003 : 110)
 d. 그리하여 하라는 대로 눈물을 흘려 기도를 해보고 (중략) 금식을 해보고, 신주(神酒)를 마시고 취해보며 요가 잠을 자도 보고, 가지가지의 고행을 해보고, ~ (함석헌2009 : 68)

(26)は손세모듈(2006 : 208)から引用したものであり、(27)は筆者(=引用者)が採集したものであるが、いずれも日常会話で使用可能な文であると判断される。このようにV-어(V-e)形が1音節になる場合にもその境界部にとりたて詞の挿入を許す場合があり¹¹⁾、従って、和田(2011)の1音節制約に関する上記の分析も過剰な一般化であると指摘することができる。

以上、本節では、和田(2011)の問題点として、1)韓国語の複合動詞が網羅されていないこと、2)複合動詞と認定しにくいものが含まれていること、3)分析の過程において過剰な一般化が見られることの3点を取り挙げ、批判的な観点から検討した。次節では、本節の考察結果も参照しつつ、本稿における韓日両言語の動詞結合の体系を新たに提示する。

4. 本稿における韓日両言語の動詞結合の体系

本稿では両言語の動詞結合の体系を以下の表3と表4のように整理する。ちなみに、本稿で構築する動詞結合の体系は、李(2009b、2010、2011、2012b、2013)の考察結果

11) この問題に対し、손세모듈(2006 : 208)は「선행동사가 1음절인 경우 보조사 개입이 덜 활발한 면이 있는 것으로 생각된다」のように指摘しており、その可能性を否定しなかったのは適切な記述であろう。

にも基づいている。なお、比較のために表1の和田(2011)の体系を再構成して表2に再び示し¹²⁾、解説の便宜を図るため、3つの表を「表2・表3・表4」「表2'・表3'・表4'」のように2段構成の形にして提示する。

【表2】和田(2011)の韓日両言語の複合動詞の体系

①考察対象	韓国語の複合動詞			日本語の複合動詞			
	語幹CV	V-eCV	AVC	語彙的CV	テ形CV	統語的CV	AVC
②タイプ	—	—	—	—	—	—	—
③具体例	오르내리다	구워 먹다	읽어 주다	押し開ける	見て取る	読み始める	読んであげる
④活用形	語幹	V-e形	V-e形	連用形	テ形	連用形	テ形
⑤該当例	—	—	—	—	—	—	—
⑥生産性	低	高/低	高	低	低	高	高
⑦透明性	低	高/低	高	低	低	高	高

【表3】本稿における韓国語の動詞結合の体系

①考察対象	韓国語の動詞結合			
	介在要素無しタイプ	介在要素有りタイプ		
② ¹ 下位分類	CV	CV		句
② ² 下位分類	—	CV	補助動詞結合	—
③具体例	오르내리다	알 ^ㄹ 보다/파 ^ㅍ 들다/ 넘 ^ㄴ 어 ^어 보다	먹 ^ㅁ 어 보다/자 ^ㅈ 고 있다	구 ^ㄱ 워 먹 ^ㅁ 다 ¹³⁾ /쉬 ^ㅅ 고 가다/씻 ^ㅍ 어 ^어 다 먹다
④活用形	語幹	語幹-어・고・어다	語幹-어・고	語幹-어・고・어다
⑤該当例	少なめ	豊富/少なめ/少なめ	豊富/豊富	豊富/豊富/豊富
⑥生産性	低	個別的/低/低	高/高	高/高/高
⑦透明性	低	個別的/低/低	高/高	高/高/高

【表4】本稿における日本語の動詞結合の体系

①考察対象	日本語の動詞結合				
	介在要素無しタイプ		介在要素有りタイプ		
② ¹ 下位分類	CV		CV		句
② ² 下位分類	語彙的CV	統語的CV	CV	補助動詞結合	—
③具体例	褒め称える	食べ始める	見 ^ㄷ 取る	食 ^ㅍ べ ^ㅍ みる	焼い ^ㅍ 食 ^ㅍ べる
④活用形	語幹(但)		語幹(但)-て	語幹(但)-て	語幹(但)-て
⑤該当例	豊富		少なめ	豊富	豊富
⑥生産性	低	高	低	高	高
⑦透明性	低	高	低	高	高

※④における「但」とは、子音語幹動詞がV1に立つ場合だけ子音語幹直後に「i」母音を挿入せよ、という意味である。

以下、表2の和田(2011)の体系と比較しながら、本稿で構築した表3と表4の体系について、番号順に解説していく。

第1に、和田(2011)は考察対象を「複合動詞」に限定しているが、本稿では「動詞

12) 表1における「部門」と「隣接性」については、前者は本稿では取り扱わない概念であり、後者は動詞結合はV1とV2が隣接するのが基本で、それが特に弁別的な特徴にはならないという判断で除外した。

13) 周知の通り、この例は「굽다+{-어}+먹다」の結合であり、V1と介在要素が結合する際に、①子音から母音への転換(굽어→구우어)、②母音融合(구우어→구워)という二つの音韻現象が生じる。なお、動詞結合に見られる音韻現象の詳細については、李(2009a: 23~87)を参照されたい。

結合」という名で複合動詞と分類しにくいものまで広く取り扱っている。和田(2011)より考察対象を拡大することで、より広範囲な例が分析できる環境を完備することができ、このことは複合動詞、ひいては動詞結合の本質をより深く究明するためにも必要な作業であろう。

第2に、タイプとその下の下位分類についてであるが、和田(2011)は両言語の複合動詞を韓国語の場合は「語幹複合動詞」「V-e複合動詞」「AVC」のように、日本語の場合は「語彙的複合動詞」「テ形複合動詞」「統語的複合動詞」「AVC」のようにタイプ分けしているが、本稿では、両言語の動詞結合をまず「介在要素の有無」という形態論的基準によって「介在要素無しタイプ」と「介在要素有りタイプ」に2分した後、各々のタイプの中で更なる下位分類を行っている。その下位分類と関連しては、韓日両言語ともに、1)介在要素無しタイプには1語扱いする「複合動詞」のみであること、2)介在要素有りタイプには「複合動詞」以外に2語扱いする「句」も含まれていること、3)介在要素有りタイプの複合動詞の中に「補助動詞結合」を位置づけたことの3点が特徴的であり¹⁴⁾、和田(2011)とは区別される。また、本稿においては日本語の場合、介在要素無しタイプの複合動詞における下位分類として「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」とを区分していることも確認されたい。

第3に、具体例に関しては、1)和田(2011)が「複合動詞」として認定した「구워 먹다」のような例(=3d)を本稿においては「句」と分析したこと、2)韓国語の介在要素有りタイプの複合動詞の中に「과고들다, 타고나다」のような {-고} 有りタイプと「넘어다보다, 떠다밀다」のような {-어다} 有りタイプも含めたこと、の2点がポイントになっている。そして、両言語においてそれぞれ「句」と分類される具体例も確認されたい。

第4に、活用形についてであるが、和田(2011)は「語幹」「V-e形」「連用形」「テ形」という別々の用語で分析しているが、本稿では「語幹」という概念で統一した上、介在要素有りタイプにおいては「語幹-어·고·어다」「語幹(但)-て」のような形に介在要素を顕著化させている。和田(2011)と比べて、日本語の一部の場合においては但し条件を必要とするが¹⁵⁾、「語幹」という概念で統一させることで、両言語の動詞結合におけるV2の前方の形態構造をよりシンプルな形で整理できたと考えている。

第5に、該当例は各々の下位分類に属する例がどのくらいあるのかを示すものであるが、

14) 3点目の特徴、すなわち「補助動詞結合」を複合動詞の中に位置づけたことは、李(2014a, 2014b)の考察結果に基づいている。ちなみに、李(2014a, 2014b)は「먹고 가다」のような典型的な「句」に見られる統語上・意味上の特徴を抽出し、それらを用いて、1)境界部の分離可能性、2)V1・V2の副詞類による修飾可能性、3)V1・V2の格支配能力の有無、4)V1・V2の連体修飾化の可能性、5)元の文への復元可能性、6)V1・V2の否定可能性、7)V1・V2の尊敬表現の可能性(李2014bのみ)、8)V1・V2は本来の意味か、9)V1・V2はそれぞれ独立した別々の動作かという九つの基準を設けた上、個別の動詞結合の例を分析したものである。同氏は考察結果の一つとして「צוע 가다, 쓰고 있다」のような一般に「補助動詞結合」と呼ばれるものは形態的なものであり、複合動詞の一種として見ることを指摘している。

15) 但し条件に関するより詳しいことについては李(2009a : 15~22, 2012a : 74)を参照されたい。

和田(2011)では言及されていなかったため、本稿において新しく追加した。正確な数値ではなく、具体性に欠ける言い方でしか表せなかったが、各々の下位分類に属する例の多寡を把握するには参考になるだろう。ちなみに、韓国語の介在要素無しタイプの複合動詞と「見て取る」のような日本語の介在要素有りタイプの複合動詞はそれぞれに該当する例が少数しかなく、それを明示するために、表3と表4ではそれらの幅が相対的に狭くなっていることも確認されたい。

第6に、生産性についてであるが、このことに関しては、1) V2に大きく依存し、2) 「歩き続ける、泳ぎ続ける、食べ続ける、…」 「歩いている、泳いでいる、食べている、…」のように意味的制限のない限り、数多くの例を作り出すものから「掻きむしる、*こすりむしる、*ちぎりむしる」「(挑戦を)受けて立つ、*(指摘を)踏まえて立つ、*(批判を)浴びて立つ」のごく少数の動詞しか作り出せないものまで様々な度合いが見られることをまず理解しておく必要がある。この2点を踏まえた上で、和田(2011)の⑥を見ると、同意できる考察結果が示されていると判断される。従って、本稿においても⑥生産性に関しては和田(2011)と同一の結果を示した。但し、和田(2011)の「高/低」という記述に関しては例によって異なるという意味なので、本稿においては「個別的」と修正を施している。

第7に、意味的透明性の違いは、影山(1993:78)が指摘しているように、概ね⑥生産性の違いとも呼応し、和田(2011)でも⑥と⑦の結果が同一になっているが、これに問題になる箇所はないと思われる。従って、本稿においても⑥生産性の結果と一致させている。

【表2'】 和田(2011)の韓日両言語の複合動詞の体系

①考察対象	韓国語の複合動詞			日本語の複合動詞			
	語幹CV	V-eCV	AVC	語彙的CV	テ形CV	統語的CV	AVC
②タイプ	—	—	—	—	—	—	—
③～⑦	—	—	—	—	—	—	—
⑧代用表現化	不可	不可	可	不可	不可	可	可
⑨とりたて詞挿入	不可	可	可	不可	可	不可	可
⑩V2の反復	不可	可	可	不可	可	不可	可

【表3'】 本稿における韓国語の動詞結合の体系

①考察対象	韓国語の動詞結合			
	介在要素無しタイプ	介在要素有りタイプ		
② ¹ 下位分類	CV	CV		句
② ² 下位分類	—	CV	補助動詞結合	—
③～⑦	—	—	—	—
⑧代用表現化	不可	不可	個別的	可
⑨とりたて詞挿入	不可	可(但)	可(但)	可(但)
⑩V2の反復	不可	個別的	個別的	個別的

※⑨における「但」とは、V2の前方が1音節である場合はとりたて詞の挿入が容認されないこともある、という意味である。

【表4'】 本稿における日本語の動詞結合の体系

①考察対象	日本語の動詞結合				
②タイプ	介在要素無しタイプ		介在要素有りタイプ		
② ¹ 下位分類	CV		CV		句
② ² 下位分類	語彙的CV	統語的CV	CV	補助動詞結合	—
③～⑦					
⑧代用表現化	不可	可	不可	可	可
⑨とりたて詞挿入	不可		可	可	可
⑩V2の反復	不可		個別的	個別的	個別的

第8に、V1の代用表現化については、表3'と表4'において、1)韓国語の介在要素無しタイプの複合動詞と日本語の介在要素無しタイプの「語彙的複合動詞」は「不可」であり、日本語の介在要素無しタイプの「統語的複合動詞」は「可」である、ということは和田(2011)の表2'の結果と同一であること、2)韓国語の介在要素有りタイプの複合動詞と日本語の介在要素有りタイプの複合動詞が「不可」となっている、ということも表2'の韓国語の「V-e複合動詞」と日本語の「テ形複合動詞」が「不可」になっていることと同一の結果であること、の2点をまず確認されたい。それから、3)和田(2011)の表2'において韓国語の「AVC」が「可」となっているのが本稿においては韓国語の介在要素有りタイプの「補助動詞結合」が「個別的」と修正されていることも合わせて確認されたい。ちなみに、3点目における修正は、(18)～(20)の例文を通して確認したように、韓国語の介在要素有りタイプの「補助動詞結合」と分類される例の中には、V1の代用表現化が難しいものも存在することを反映した結果である。

第9に、とりたて詞の挿入に関しては、表3'と表4'において、1)韓国語の介在要素無しタイプの複合動詞と日本語の介在要素無しタイプの複合動詞が「不可」となっていることは、和田(2011)の表2'で韓国語の「語幹複合動詞」と日本語の「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」が「不可」となっていることと同一の結果であること、2)韓国語と日本語の介在要素有りタイプにおいては全ての下位分類において原則として「可」となっており、それは表2'の韓国語と日本語の「V-e複合動詞」「テ形複合動詞」と両言語の「AVC」における結果と一致すること、の2点を確認されたい。結果的に、和田(2011)の整理と同一の結果であると言えることができるが、韓国語の介在要素有りタイプにおいては「可(但)」のように但し条件を付加することによって、(24)と(25)のような現象を反映し、より精密な記述を試みている。

第10に、V2の反復に関しては、表3'と表4'において、1)韓国語の介在要素無しタイプの複合動詞と日本語の介在要素無しタイプの複合動詞が「不可」となっていることは、表2'で韓国語の「語幹複合動詞」と日本語の「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」が「不可」となっていることと同一の結果であること、2)韓国語と日本語の介在要素有りタイプにおいては全ての下位分類において「個別的」となっており、それは表2'の韓国語と日本語の「V-e複合動詞」「テ形複合動詞」と両言語の「AVC」における「可」とは対

照的であること、の2点を確認されたい。このうち、後者の相違点は、3.3.において第2点目と第3点目に関わる議論を通して得た結果に基づいているが、より精密な記述のためには今後数多くの例を綿密に分析する必要がある。不十分ではあるが、⑩V2の反復に関しては、和田(2011)の問題の箇所に修正を加えたところに意味を置くことにする。

以上、和田(2011)の体系と比較しながら、本稿で構築した体系について解説した。次節では、本稿のポイントを整理しながら、まとめることにする。

5. まとめ

本稿は、韓国語と日本語の「複合動詞」の体系について分析した和田(2011)を批判的な観点から検討し、両言語の「動詞結合」を体系的に整理しようと試みたものである。本稿のポイントをまとめると、以下の通りである。

- [一] 考察対象を「動詞結合」という名で「複合動詞」と分類しにくいものまで広く取り扱っている。
- [二] 両言語の動詞結合を「介在要素の有無」という形態論的基準によって「介在要素無しタイプ」と「介在要素有りタイプ」とに大別している。
- [三] 両言語ともに動詞結合におけるV1の形態を「語幹」という概念で統一させ、その形態構造をよりシンプルな形で記述している。
- [四] 韓国語の介在要素有りタイプの複合動詞として、{-고}有りタイプと{-어다}有りタイプの存在も指摘し、一般に韓国語の複合動詞として取り扱われているものを網羅している。
- [五] 「구워 먹다」のように、V1とV2の本来の意味を持ち、境界部の分離が比較的自由に許される例は、1語扱いする「複合動詞」ではなく、2語扱いする「句」と分類し、可能な限り「複合動詞」の認定を厳格にしようとしている。
- [六] 韓国語の介在要素有りタイプの「補助動詞結合」に分類される例の中には、V1の代用表現化が可能なものもあれば、それが難しいものもあることを指摘している。
- [七] 韓国語の介在要素有りタイプの「補助動詞結合」に分類される例の中には、V2の反復が可能なものもあれば、それが難しいものも存在することを指摘している。
- [八] 韓国語の介在要素有りタイプの動詞結合は、V2の前方の形態が1音節である場合、とりたて詞の挿入が難しいが、それが全くできないわけではなく、可能な場合もあることを指摘している。

この内、[六]~[八]に関しては先行研究の指摘を大いに参考にしており、また、より多くの例を綿密に観察する必要のある箇所も残されているが、[一]~[八]のようなポイントを提示することによって、和田(2011)の不十分なところを補うことができ、両言語の動詞結合の全体像を把握できる体系も構築できたと考えている。今後、更なる観察と分析を通して、両言語の動詞結合の本質を究明していきたい。

【参考文献】

- 강현화(1998) 『국어의 동사연결 구성에 대한 연구』 한국문화사, pp.71-148
고영근·구본관(2008) 『우리말 문법론』 집문당, pp.239-240
김석득(1992) 『우리말 형태론—말본론—』 탑출판사
김기혁(1987) 「국어 보조동사 연구」 연세대학교 박사학위 논문
김영태(1998) 『현대국어 보조용언 연구』 문창사
김일병(2000) 『국어합성어연구』 도서출판 역락, pp.100-102
김정은(2000) 『수정·증보판 국어 단어형성법 연구』 도서출판 박이정, pp.163-166
김창섭(1981) 「現代國語의 複合動詞 研究」 『國語研究』 47, 國語硏究會, pp.1-98
남기심·고영근(1993) 『표준국어문법론 개정판』 탑출판, pp.214-215
박선옥(2005) 『국어 보조동사의 통사와 의미 연구』 도서출판 역락
서정수(1996) 『수정 증보판 국어문법』 한양대학교출판원
손세모들(1996) 『국어 보조용언 연구』 한국문화사
———(2006) 「강현화의 동사연결 구성에 대한 이의—강현화(1998)을 중심으로—」 『형태론』 8-1, 도서출판 박이정, pp.199-216
정원수(1992) 『국어의 단어 형성론』 한신문화사, p.54
최현배(1961) 『우리말본』 정음문화사
한길(2006) 『현대 우리말의 형태론』 도서출판 역락, pp.197-198
황화상(2013) 『현대국어 형태론—개정판』 도서출판 지식과교양
浅尾仁彦(2009) 「動詞連続の文法的性質を捉え直す—日韓対照を通じて—」 関西言語学会第34回大会ワークショップ「複雑述語の形式・機能とダイナミズム」ハンドアウト、関西言語学会、pp.1-11
李忠奎(2009a) 「日韓語の動詞結合に関する対照研究」 北海道大学大学院文学研究科提出学位論文、pp.1-222
———(2009b) 「形態レベルからみた日韓語の動詞結合—「連用形」「語基」「語幹」を適用した形態構造分析—」 『日本語文学』 第43輯、韓国日本語文学会、

- pp.89-117
- (2010)「日韓語の動詞結合の形成過程と分類—「日韓語の動詞結合形成モデル」の構築を通して—」『日本文化學報』第47輯、韓国日本文化学会、pp.83-100
- (2011)「日韓語の動詞結合形成モデルの活用—「～食べる」と「～먹다」の例を通して—」『日本文化學報』第50輯、韓国日本語文化学会、pp.41-59
- (2012a)「日韓語と韓国語の複合動詞の相違点—塚本(2009)の相違点の批判的な検討—」『日本文化學報』第54輯、韓国日本文化学会、pp.65-81
- (2012b)「韓国語の動詞結合の日本語訳について—内山(1997)の例を中心に—」『日本語教育』第62輯、韓国日本語教育学会、pp.143-161
- (2013)「日韓両言語の「並列」複合動詞について—その下位分類を中心に—」『日本語文学』第56輯、韓国日本語文学会、pp.97-117
- (2014a)「介在要素有りタイプの動詞結合の下位分類—「가다」をV2とする例を中心に—」『동북아문화연구』39、동북아시아문화학회、pp.277-297
- (2014b)「{－고}有りタイプの動詞結合の下位分類」『日本語文学』第62輯、韓国日本語文学会、pp.69-97
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房、p.13、78
- 塚本秀樹(2003)「複合動詞と格支配—日本語と朝鮮語の対照研究—」仁田義雄編『日本語の格をめぐる』くろしお出版、pp.225-246
- (2004)「文法体系における動詞連用形の位置づけ—日本語と韓国語の対照研究—」佐藤慈・堀江薫・中村涉編『対照言語学の新展開』ひつじ書房、pp.297-317
- (2009)「日本語と朝鮮語における複合動詞再考—対照言語学からのアプローチ—」『油谷幸利先生還暦記念論文集朝鮮半島のことばと社会』明石書店、pp.313-341
- 和田学(2011)「二つの語彙的緊密性—韓国語(と日本語)の複合動詞—」『山口大学文学会誌』61巻、山口大学文学会編、pp.83-104

【文学作品・辞典類】

- 강준희(1996)『이카로스의 날개는 녹지 않았다 (하)』새미、p.197
- 김후란(2003)『너로 하여 우는 가슴이 있다』솔과학、p.110
- 이태준(2001)『소련기행·농토·먼지』깊은샘、p.23
- 함석헌(2009)『새 시대의 종교』한길사、p.68
- 『연세한국어사전』(1998) 두산동아
- 『표준국어대사전』(1999) (<http://stdweb2.korean.go.kr/main.jsp>) 두산동아

要 旨

本稿は、韓国語と日本語の複合動詞の体系について分析した和田(2011)を批判的な観点から検討し、最終的には韓日両言語の動詞結合を体系的に整理しようと試みたものである。和田(2011)の分析と対照的な本稿のポイントを整理すると、1)考察対象を「動詞結合」という名で「複合動詞」と分類しにくいものまで広く取り扱っている、2)両言語の動詞結合を「介在要素の有無」という形態論的基準によって「介在要素無しタイプ」と「介在要素有りタイプ」とに大別している、3)両言語ともに動詞結合におけるV1の形態を「語幹」という概念で統一させ、その形態構造をよりシンプルな形で記述している、4)韓国語の介在要素有りタイプの複合動詞として、{-고}有りタイプと{-어다}有りタイプの存在も指摘し、一般に韓国語の複合動詞として取り扱われているものを網羅している、5)「구워 먹다」のように、V1とV2の本来の意味を持ち、境界部の分離が比較的自由に許される例は、1語扱いする「複合動詞」ではなく、2語扱いする「句」と分類し、可能な限り「複合動詞」の認定を厳格にしようとしている、6)韓国語の介在要素有りタイプの「補助動詞結合」に分類される例の中には、V1の代用表現化が可能なものもあれば、それが難しいものもあることを指摘している、7)韓国語の介在要素有りタイプの「補助動詞結合」に分類される例の中には、V2の反復が可能なものもあれば、それが難しいものも存在することを指摘している、8)韓国語の介在要素有りタイプの動詞結合は、V2の前方の形態が1音節である場合、とりたて詞の挿入が難しいが、それが全くできないわけではなく、可能な場合もあることを指摘している、のようなものが挙げられる。

本稿では以上のようなポイントを提示することによって、和田(2011)の不十分なところを補うことができ、両言語の動詞結合の全体像を把握できる体系も構築できたと考えている。

キーワード：複合動詞、補助動詞結合、句、動詞結合、介在要素、語幹、とりたて詞

투 고 : 2014. 11. 30
1차 심사 : 2014. 12. 13
2차 심사 : 2015. 1. 3